

中国語可能表現のメカニズム

— “能” と “会” 構文を中心に —

A Mechanism of Chinese Potential Expressions:

A Survey of “neng” and “hui” Constructions

安本 真弓

YASUMOTO Mayumi

- ◆ 要旨：日本語の可能表現に関しては、金田一春彦（1951）では「細かい言い分けをしない」と指摘するが、それに対して中国語の可能表現は複雑な様相を呈し、各表現形式の間に微妙なニュアンスの違いがあるとされる。本稿は認知意味論からアプローチし、言語事実から“能”と“会”構文を中心とする可能表現のメカニズムを考察してみた。その結果、意味特徴として“能”は「動態的」・「臨時的」、 “会”は「静態的」・「恒常的」、また構文的意味として“能”は「話し手は、「さまざまな状況の下、主語がある動作・行為できる」との判断を行う」、 “会”は「話し手は、「常態の下、主語がある動作・行為できる（だろう）」との推測を行う」ということが明らかになった。最後に第二言語習得の立場から可能を表す“能”と“会”構文の指導向上に向ける提案を試みた。

1 問題提起

平成29年度科研費基盤研究（C）⁽¹⁾の一環として実施した日本人大学生を対象とする可能表現の習得状況に関する測定テストによると、“能”と“会”のどちらかを選択する問題の正答率は平均して30%半ば⁽²⁾であった。この結果から両者の使い分けができていない日本の大学における中国語学習者は6割強あることが分かった。日本語の可能表現は金田一春彦（1957）の記述で見られるように、細かい言い分けをしない。一方、中国語の可能表現は一般に、助動詞可能表現と補語可能表現（通常「可能補語」という）とに二分され、助動詞可能表現については“能”、“会”、“可以”などを代表とする意味や用法の異なる表現が存在し、補語可能表現については「動詞＋得/不」の後にさまざまな結果や方向等を表す補語を取ることができ、生産性の非常に高い言語表現であると認識されている。このため、中国語可能表現に関する文法体系が複雑なものとなり、結果として日本人中国語学習者にとって習得しがたい文法ポイントの一つといわれてきた。そこで、本稿⁽³⁾では先行研究を踏まえたうえで認

知意味論からアプローチして主に“能”と“会”構文を中心とする可能表現のメカニズムを考察すると同時に、両者の意味機能及びその使い分けを明らかにしてみたい⁽⁴⁾。

1.1 教科書の記述

日本で刊行されている十数冊の中国語教科書を確認すると、“能”と“会”の意味機能については一般に次のような説明がなされている（ここでは「教科書 A」、「教科書 B」を取り上げる）。

教科書 A では、“能”と“会”を次のように解説している。

“能”：「総合的能力や可能の到達度などを表す」

（1）你能看中文小说吗？

（訳：あなたは中国語の小説を読むことができるか）

“会”：「習得によってある技能を持っている」

（2）我会开车。

（訳：私は車の運転ができる）

教科書 A の解説通りだと、例（1）の「中国語の小説を読める」という可能表現で使用された“能”は総合的能力、もしくは可能の到達度を表すことになるが、中国語の小説を読めるようになるためにはおそらく中国語の勉強をして一定レベルの中国語習得が必要不可欠と思われる。習得してある技能を持つことであれば、“能”にではなく、例（2）で使った“会”に関する意味機能であると教科書 A が記述されていることから、両者の使い分けにおける明確な線引きができていないと言わざるを得ない。

教科書 B では、次のように解説している。

“能”：「能力や客観的条件があって、できる」

（3）我能游一百米。

（訳：私は100m を泳げる）

（4）今天我能去。

（訳：今日私は行くことができる）

“会”：「技能を習得してできる」

（5）你会弹吉他吗？

（訳：あなたはギターを弾くことができるか）

教科書 B では例（5）の“会”を教科書 A とほぼ同様に「技能を習得してできる」としたが、人があることを習得して身につけた場合、ある種の能力を持っているといえる。しかし、教科書 B はまた例（3）、（4）の“能”を「能力があってできる」としていることから、両者の区別がつかなくなってしまう。

さらに、“能”の「客観的条件があってできる」ことの意味をどのように捉えたらよいのかという問題がある。つまり「客観的条件」とは、具体的にどのように定義されているのかが明示されていない。

いからである。教科書 B の解説に従えば、例（3）の「100m を泳げる」ことはおそらく「私の能力」があつてできる、また例（4）の「今日行ける」ことはおそらく「客観的条件」としての「今日」にできるとのことだが、なぜ「ヒトの能力」は「客観的」ではなく、「今日」になると「客観的」なのかという説明がつかなくなる。それは「ヒトがある種の能力を持っている」ことを他人から見れば「客観的」だと捉えても何ら違和感を覚えないからである。

1.2 文法書の記述

朱德熙《语法讲义》（1982：62-63）は、次のように解説している。

A “能”、“会”：表示主观能力做得到做不到。

（訳：“能”、“会”は主観的能力によりやれるか否かを表す⁽⁵⁾）

（6）能（够）挑二百斤的担子上山。

（訳：二百斤の荷物を担いで山に登ることができる）

（7）又会吹笛子，又会拉手风琴。

（訳：笛を吹くことができるし、アコーディオンを弾くこともできる）

B “能”、“会”：表示客观可能性。

（訳：“能”、“会”は客観的可能性を表す）

（8）看样子会下雨。（訳：（見たところ）雨が降りそうだ）

（9）干这种事的人还能是好人？

（訳：こんなことをする人が良い人なわけがない）

C “能”表示环境或情理上许可。

（訳：“能”は環境もしくは情理上の許可を表す）

（10）教室里不能抽烟。

（訳：教室では煙草を吸ってはいけない）

朱德熙（1982）では、“能”と“会”のいずれも「主観的能力」または「客観的可能性」を表すとしている。例（6）（7）では「ヒトの能力」を「主観的能力」と見なし、「客観的可能性」については例（8）（9）を挙げているが、しかし例（8）の「（見たところ）…そうだ」、例（9）の「…なわけがない」という日本語訳からもわかるように、どちらも「ヒトの推測」であると捉えられるため、なぜこれらが客観的な可能性を表すのかを解釈に窮すると言わざるを得ない。

呂叔湘（1999）《现代汉语八百词（增订本）》で記述されている“能”と“会”の意味機能について、次の表（1）にまとめた。

表1：“能”と“会”の意味機能（《现代汉语八百词（增订本）》）

“能”	“会”
①有能力或有条件做某事 (訳：物事をする能力または条件が備わっている)	①懂得怎样做或有能力做某事 (訳：どのようにするかをわかる、または物事をする能力が備わっている)
②善于做某事 (訳：物事を上手にすることを表す)	②善于做某事 (訳：物事を上手にすることを表す)
③有可能 (訳：可能である)	③有可能 (訳：可能である)
④有某种用途 (訳：ある用途を持っている)	
⑤情理上许可 (情理上の許可)	

注：「」は部分的意味の一致、「」は意味が完全に一致することを表す。

この表で問題となることは少なくとも2つあるが、1つは“会”の意味項目①にある“懂得”をどのように理解すれば良いか、もう一つは“能”の意味項目④（「ある用途を持っている」）についてその他の意味機能との関連性をどう捉えたら良いかであろう。

1.3 先行研究

“能”と“会”に関する先行研究は数多く存在する。そのなかでも、黄麗華 (1995)、相原茂 (1997)、片桐光知子 (2006)、侯瑞芬 (2009)、王小梅 (2013)、叶玉英 (2014)、張素娟 (2014)、渡邊奈津子 (2014)、大江元貴 (2015) などは、“能”と“会”の意味特徴を多面的に分析し両者の相違点を明らかにしようと努めた点では高く評価できるが、いくつかの問題点も無視できないため、次に、1.2の文法書記述と異なる立場を取られる先行研究を2つ挙げていく。

1.3.1 先行研究 (1)

“能”：与客观域的联系最为密切。

(訳：“能”は客観的領域との関連は最も密接している)

“会”：与主观域的关联更为自然。

(訳：“会”は主観的領域との関連はより自然である)

朱德熙 (1982) では、“能”と“会”はいずれも「主観的能力」と「客観的可能性」に関わっているとしているが、先行研究 (1) では“能”は「客観域」と、“会”は「主観域」との関わりがより馴染みやすいと指摘している。しかし、肝心の「客観域」と「主観域」の定義や使用範囲については明示されていない。

1.3.2 先行研究 (2)

“能”：外的条件により動作・状態可能に焦点を当てる。

“会”：主体的意志、または状況の働きかけにより動作・状態可能を強調する。

先行研究 (2) では“会”が「主体的意志」に関わっているとしたことは先行研究 (1) の「主観

域」と大差ないが、“能”の「外的条件により動作・状態可能」と“会”の「状況の働きかけにより動作・状態可能」との相違点については明確な説明がなされていない。

2 考察

上掲の文法書、先行研究での記述や説明を踏まえたうえで、本稿では認知意味論（ジョージ・レイコフ／池上嘉彦・河上誓作他訳（1993）の「生得説の客観主義の認知論」⁽⁶⁾）に基づき、言語事実と照らし合わせて考察を進めたい。

まず、次の2例を見てみよう。

- { (11a) ○他能游泳。(訳：彼は泳げる)
- { (11b) ○他会游泳。(訳：彼は泳げる)

この2例はいずれも先行文または後続文がなく、単に「彼は泳げる」という事実を表現するだけである。こういう場合に“能”も“会”も使用可で、どちらも彼の「能力」を表しているといえる。では、次の2例はどうだろうか。

- { (12a) ○他能游一千米。(訳：彼は1000m 泳げる)
- { (12b) ×他会游一千米。

例(11)の2例と同様、依然として彼の「泳げる」という基本的「能力」を表すが、そのうえ具体的な数値「1千m」を提示することで彼がどの程度泳げるかという能力の高低を具現化している。1.1で言及した教科書Aでは、これを“能”の意味機能である「可能の到達度」とし、また一部の文法書や先行研究では「一定のレベルに達する」とした。そうすると、この「到達度」や「一定のレベル」とは、一体どのぐらいの数値に達すれば良いのかを次に挙げる例文をもとに検証してみよう。

- { (13a) ○他能(×会)游五米。(彼が5m 泳げる)
- { (13b) ○他能(×会)游五百米。(彼が500m 泳げる)
- { (13c) ○他能(×会)游一千米。(彼が1000m 泳げる)

例(13a)の5m、(13b)の500m、(13c)の1000mといった具体的な数値の提示があれば、“能”を使う構文はいずれも適格文となる。極端に言えば5mよりもうんと短くても、例(12a)や例(13)のように具体的な数値さえ文中に提示されれば、“会”は使用不可で“能”は使用可能であることから、“能”は距離の長さを問わずに具体的な数値と共起可能になり、「到達度」や「一定レベル」といった解説と齟齬が生じてしまうとわかる。さらに考察を続ける。

- { (14a) ○刻苦练习的话，他现在能游五百米，明年能游一千米。
 - { (14b) ×刻苦练习的话，他现在能游五百米，明年会游一千米。
- (訳：彼が厳しい練習に耐えれば、今は500m だが来年には1000m 泳げる)

例(14a)の“能”も「ヒトの能力」を表すが、教科書や先行研究ではそこから一步踏み込んで「到達度」や「一定のレベルに達する」まで表すとした点は“能”の本質的な意味を正確に捉えていると

は言い難い。現在は500m だとしても、練習に励むと来年は1000m 泳げるようになることから、時が変わり状態が変わった場合において「会」は使用不可で「能」は使用可能となるならば、「能」は「能力」を表すにしても如何なる程度かを表すまでは言語事実からは確認できないのである。したがって、次のように考えられる。

“能”は「都度に行えるか否か」を問う⇒「臨時的」

では、具体的な数値を差し出さず、気象現象についてはどうなるだろう。

- { (15a) ○今天风和日丽，能游泳。
(訳：今日は良いお天気だから、泳ぐことができる)
- { (15b) ○今天下暴雨，不能游泳。
(訳：今日は激しい雨が降るから、泳ぐことができない)
- { (16a) ×今天风和日丽，会游泳。
- { (16b) ×今天下暴雨，不会游泳。

例 (15)、(16) から、天気のような自然現象が先行する文で、使用可能なのは“能”のみとわかる。ヒトの能力とは無関係の、ヒトによるコントロールができない刻一刻と変化する気象現象でも“能”が使われることから、

“能”は「都度に行えるか否か」を問う⇒「臨時的」

といえる。では、具体的な数値でもなく、気象現象でもなく、ある場所が差し出されると、どうなるだろう。

- { (17a) ○这儿能（×会）抽烟吗？（訳：ここではタバコを吸うことができるか）
- { (17b) ○教室里不能（×不会）抽烟。（訳：教室の中ではタバコを吸ってはいけない）

場所で連想されるものには、教室・映画館・博物館・空港・電車内・ホームなどのさまざまな建物や乗り物の内部以外に、路上・山・川などがある。こういった場所で、ある動作・行為できるか否かを表現する際、例 (17) から“能”の使用しか認められないとわかる。朱德熙 (1982) ではこの“能”の意味機能を「環境または情理的な許可」としたが、ヒトの能力とは関係なく、ある場所で動作・行為ができるか否かを表現する場合も例 (17) のように場所が変わったとしても、“会”を使用せず“能”の使用しか認められないことから、次のように考えられる。

“能”は「都度に行えるか否か」を問う⇒「臨時的」

では、“会”はどんな振る舞いをしているだろうか。

- { (18a) ○水到摄氏一百度会开。（水は摂氏百度になると沸く）
- { (18b) ?? 水到摄氏一百度能开。

例 (18a) の「摂氏百度になると沸く」は水の特性の一つである。この「沸く」を「モノ」の動作だと捉え、その動作・行為が一般的な状況下で必ず「できる」ことを表す場合、“会”が用いられ、“能”の使用は例 (18b) のように許容度がかなり低くなることから、1.1で言及した教科書 A・B の記述(“会”

は「習得によってある技能を持っている」)では、例(18a)、(18b)に対して到底説明できないといえる。

- 再掲 (19a) ○我会开车。(訳：私は車の運転ができる)
- (19b) ○我会游泳。(訳：私は泳ぐことができる)
- (19c) ○我会抽烟。(訳：私はたばこを吸うことができる)

いずれも「ヒト」のある種の能力(嗜好⁽⁷⁾)であり、こういった単にその「ヒト」はある動作・行為ができることのみを表す場合、“能”ではなく、“会”を用いるとわかる。ただ、下記例(19b)のように先行文または後続文として数量・気象・場所などを表す語句を入れ、状況や条件などは一般平常時ではなく変化もあり得る何らかの状況下という言語環境になった場合は、“会”構文はいずれも非文となってしまう。

- (19b-1) ×我会游五百米，我不会游一千米。
- (19b-2) ×昨天天气很好，我会游泳。今天天气不好，我不会游泳。
- (19b-3) ×在东京我会游泳，在大阪我不会游泳。

無論、例(19a)、(19b)も同様の言語事実が観察された。このことから、通常の一般的な状況下で、ある動作・行為できるか否かを表すのは“会”の役割であるとわかる。したがって、次のように考えられる。

“会”は「常時にできるか否か」を問う⇒「恒常的」

ここまでの考察をまとめると、“能”は「臨時的」、「会」は「恒常的」といった意味特徴を持つといえる。

さらに、次の例を考察してみよう。

- (20a) ○他很能说。(訳：彼はよく喋る)
- (20b) ○他很会说。(訳：彼は上手に喋る)

いずれも彼の能力であり、また「一定のレベルに達した」ことになるが、それぞれの表す意味がより限定的で明確にするために後続文を加えてみる。

- (21a) ○他很能说，已经说了大半天了。
(訳：彼はよく喋るが、もう長い時間ずっと喋りっぱなしである)
- (21b) ×他很会说，已经说了大半天了。
- (22a) ○他很会说，说出来的话令人信服。
(訳：彼は上手に喋るが、話すことには説得力がある)
- (22b) ×他很能说，说出来的话令人信服。

例(21)のように話す時間の長さを表し、その長さを例えば“大半天”を“三个小时”(3時間)、“八个小时”(8時間)などにしても、“会”は使用不可で“能”の使用が認められることから、刻一刻の変化もあり得るさまざまな状況に対応し得る“能”はいわば「動態的」である。一方、例(22)

のように話の内容、いわゆる事柄の質に関わるものを表す場合、“能”は使用不可で“会”の使用が認められることから、一旦その動作・行為ができるようになったら今日明日、将来にわたりほぼ変化することのない均一状態に対応し得る“会”はいわば「静態的」である。

また、次の例を見てみよう。

- { (23a) ○他今天病了，不能游泳。(訳：彼は今日病気になったため、泳げない)
(23b) ×他今天病了，不会游泳。

例(23a)の文脈から、本来「泳げる」ことには変わらない彼が、たまたま今日病気のため「泳げない」場合は“能”を使う。よって“能”は状況の変化に関係なく使用可能だが、“会”は状況の変化には対応しないとわかる。

例(20)から例(23)までの考察により“能”は「動態的」、「会」は「静態的」といった意味特徴を持つことが明らかになった。

今までの考察を総括すると、次のようになる。

“能”⇒「臨時的」・「動態的」的な表現

“会”⇒「恒常的」・「静態的」的な表現

また、両者の表す可能の基本的な意味を次のように記述することができる。

“能”基本義⇒「さまざまな状況の下(A1)、ある動作・行為できる」

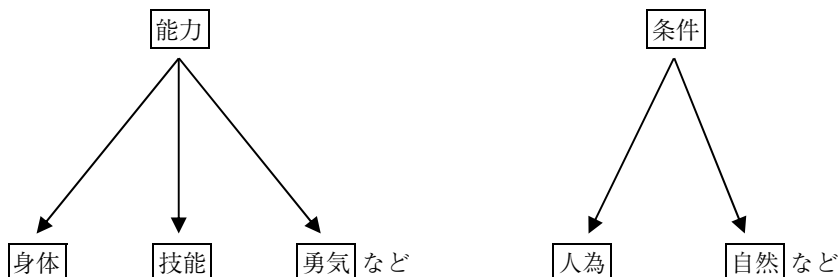
“会”基本義⇒「常態⁽⁸⁾の下(A2)、ある動作・行為できる」

A1とA2が含意されるものは、「能力」と「条件」の両方である。「能力」と「条件」については次のように定義できる。

- ◆「能力」：主語(「モノ」、「ヒト」など)が持っている「ちから」で、生まれつきのもの、また学習などを通じて獲得した後天的なものなどを含む。
- ◆「条件」：「能力」との関わりを一切持たない、あらゆるもので、自然的・人為的条件などを含む。

この「条件」と「能力」の下位分類について、図1で示すことができる。

図1：「能力」・「条件」の下位分類



さらに、考察を進めたい。例(17)と同様、場所などが文中にあると、一般に例(24a)、(24b)

のように、“能”が使用可能で“会”は使用不可となる。

- { (24a) ○这儿不能抽烟。(訳：ここではたばこを吸うことができない)
(24b) ×这儿不会抽烟。

しかし、例(25)で示したような仮定条件といった文脈を加えた場合、“会”の使用が許容されてしまう。

(25) ○即使是在这儿，他也会抽烟的。

(訳：たとえここであったとしても、彼はたばこを吸うだろう)

例(25)はいわゆる推測とされる文であるが、われわれはこういった推測の概念をどういった文法カテゴリーに入れるかを考えてみたい。王力(1954:131)は「能願式」を、「事柄の可能性・必然性・必要性等に対して判断或いは推測を加え、その話の中に意見を織り込ませていく言語形式、または、仕手の心情に重点を置きつつ、その話の中に仕手の意志を織り込ませていく言語形式(筆者訳)」と定義した。これに従えば、現在の考察対象となる可能表現は「話し手が事柄の可能性に対する判断もしくは推測」であると捉えることができるため、本稿は例(25)のような推測の概念を「可能」の文法カテゴリーに取り入れ、それを含めた包括的な可能表現の枠組の中でさらなる考察をしていく。

河上誓作(1996:111)では、「一つの文によって表わされるのは一つの事態(event)であると言えるが、ある事態に関係する参与者(participants)やそれらの間にある関係(relations)に加え、それらがどのような解釈を受けた物であるか、例えば、どのようなスコープを設定し、その中でどの参与者を認知的に際立ったものと認識するか、といった点が、その事態を述べるために使用される構文のタイプを決定する上で重要となる」との見解が示されている。この観点から“能”と“会”が使われる可能表現のメカニズムを次のように考えることができる。

- ◆ 人類が誕生して以来、生活の営みをしていくなかで、人々はさまざまな動きや自然現象を目の当たりにする。ここでの「人々」や、「さまざまな動きや自然現象」などは「参与者」とみなすことができる。
- ◆ 解釈1：「さまざまな状況(天候、環境、その時の体調など)下で、ある動作・行為できる」ことが繰り返され、ヒトはそれを観察して認識したうえで、「さまざまな状況の下」をスコープとして設定し、「参与者である動作・行為」できるとの判断を認知的に際立たせて言語形式にして伝達する際、使用される構文のタイプは“能”構文とした。
- ◆ 解釈2：「常態下で、ある動作・行為できる」ことが繰り返され、ヒトはそれを観察して認識したうえで、「常態の下」をスコープとして設定し、「参与者である動作・行為」できる(だろう)との推測を認知的に際立たせて言語形式にして伝達する際、使用される構文のタイプは“会”構文とした。

したがって、“能”構文は「状況判断可能」、 “会”構文は「常態推測可能」として機能するようになったわけである。なお「状況」と「常態」の違いについて補足説明すると、「状況」は刻一刻の変

化があり得るさまざまな状況、「常態」は普段のありさま、均一状態とする。

そこで、構文論的観点から“能”と“会”の表す構文的意味機能を、さらに話し手の視点を導入したうえで次のように概括できる。

“能” 構文義：話し手は「さまざまな状況の下、主語がXできる」との判断を行う
 “会” 構文義：話し手は「常態の下、主語がXできる（だろう）」との推測を行う

X：「ある動作・行為」を指す。

3 争点となる用例の考察

本章では中国語学研究者の間で頻繁に議論されている例文を3つ取り上げて考察してみたい。

3.1 例文（1）

- { (26a) ○蒜能杀菌。(訳：ニンニクには殺菌作用がある)
- { (26b) ×蒜会杀菌。

呂叔湘(1999)の表1では、例(26a)の“能”の意味機能を「ある用途を持っている」としたが、表1で挙げられた“能”の持つ他の意味機能とどういった関連性があるのかは不明のままである。例(26a)では「ニンニク」の特性の一つとなる「殺菌作用がある」ことを表し、その殺菌作用をヒトの目で直接観察・確認するのは困難にしても、科学的に証明されているため、モノのさまざまな効用の一つ「状況判断可能」であると捉えて“能”構文を用いるわけである。

3.2 例文（2）

- { (27a) ○老鼠生来会打洞。(訳：鼠は生まれつき穴を掘ることができる)
- { (27b) ??老鼠生来能打洞。

例(27)ではネズミのある種の能力を表しているが、その能力が果たして「生まれつきのもの」なのか否かをヒトの目で直接観察・確認はできない。ただ、ネズミが穴を掘るという行為をヒトの目に触れ、さらにヒトは目で見たこの行為を「ネズミは生まれつきできる（だろう）」と推測することがあるため、均一状態時のある行為に対する「常態推測可能」と捉えて“会”構文を用いるわけである。

なお、例(28a)、(28b)のように“生来”という語を取ると、“能”は元より“会”の使用も問題なく許容される。

- { (28a) ○老鼠会打洞。(訳：ネズミは穴を掘ることができるだろう)
- { (28b) ○老鼠能打洞。(訳：ネズミは穴を掘ることができる)

その理由として、「状況判断可能」と「常態推測可能」のどちらにも解釈できる文脈になり得るからである。これは本稿の説を裏付ける根拠となった。

3.3 例文（3）

- { (29a) ○明天会下雨吗？(訳：明日は雨が降るだろうか)
- { (29b) ??明天能下雨吗？

BCC（北京語言大学コーパス、以下同）による用例検索では、“会下雨”の用例が497例見つかった一方で、“能下雨”の用例はたったの25例しか見つからなかった。この結果からも、雨が降るかどうかは「常態推測可能」として表現するのが一般的で、「状況判断可能」として表現するのは限られた場合のみであるとわかる。例えば：

- (30) “你别再给我宽心丸吃了。” 大把头说。“我不知道哪块云彩能下雨，还不知道自个儿是咋回事？”

〔BCC：《木帮 A》张笑天 Y：1994〕

（訳：「慰めの言葉はもう結構だ」親方が言う。「どの雲が雨を降らせることができるかは知らないが、自分がどんな人間なのかを知らないわけがなからう」）

例 (30) では、ある特定の雲が“能下雨”の表す意味は「雨を降らせることができる」ことであり、常態の下ではなくさまざまな形の雲があるという「状況」の下で、どの雲が「雨を降らすことが可能か」を判断するといったニュアンスが明らかに前面に出ている様子が伺える。

4 実例による検証

4.1 “能”について

- (31) 有的手机能打国际电话，有的手机不能打。

（訳：国際電話をかけられる携帯もあれば、かけられない携帯もある）

- (32) 听说你感冒了，明天你能来上课吗？

（訳：風邪を引いたそうだが、明日授業に来られるか）

- (33) 我明天有事儿，不能去。（訳：明日は用事があるから、行けない）

- (34) 让几个会说其他土话的人大声说话，好让我们能听到。

（訳：何人かほかの方言を話せる人に大声で話すようにし、我々が聞こえるようにしよう。）

- (35) 我说，来都来了能不进去吗？

（訳：来たからには入らないわけにはいかない、と思うのだが）

〔BCC：《人民日报》(2003)〕

例 (31) は携帯電話の性能として国際電話がかけられるか否かを言語形式にする際、個々の携帯電話の性能によることから、「臨時的」・「動態的」で状況の変化が認められるため、それに対応し得る「状況判断としての可能性（状況判断可能）」を表す“能”構文が使われるわけである。例 (32) ～ (35) も同様の考察ができる。

4.2 “会”について

- (36) 他会这么做的。（訳：彼はそうにするだろう）

- (37) 日本人会很在乎别人怎么说吗？

（訳：日本人は周りの人がどう言うかをとても気にするだろうか）

(38) 他会给大家唱一首中国歌儿的。

(訳：彼は皆さんに中国の歌を一曲唄うだろう)

(39) “不管如何，我永远都是你表叔，如果你跟符家合不来，尽管回来，表叔会一辈子保护你。”

[BCC：《夜惑》连清(1999)]

(訳：どうあれ、私はどんな時でもお前の叔父に変わりはないのだから、もし符家とそりが合わなかったら、遠慮なく戻ってきなさい。叔父さんは一生お前の面倒を見るよ)

(40) 不做实事，不在实践中学习提高，只会夸夸其谈，最终将会一事无成。

[BCC《人民日报》(2003)]

(訳：具体的なことをせず、実践から学び精進するでもなく、ただ大きなことを言っているだけであれば、結局何も成し遂げないだろう)

例(36)は「彼はそのようにするだろう」を言語形式にする際、彼はいつもそうするし、今日明日、将来にわたりほぼ変わらないことから、「恒常的」・「静態的」で状況の変化が認められないため、それに対応し得る「常態推測としての可能性(常態推測可能)」を表す“会”構文が使われるわけである。例(37)～(40)も同様の考察ができる。

4.3 文脈が曖昧な用例について

- { (再掲) ○他能游泳。
- { (再掲) ○他会游泳。

“能”も“会”もいずれ使用可能だが、実際に「彼」が泳いだ姿を見たならば、例(41)のように状況変化なしの「常態推測可能」としての“会”構文を用いるだろう。

(41) 昨天我看见他游泳了，所以他会(??能)游泳。

(訳：昨日私は彼が泳いでいるのを見かけたから、彼は泳げるよ(だろう))

一方、もともと泳げる「彼」が病気から回復して元気になった場合、例(42)のように状況変化ありの「状況判断可能」としての“能”構文しか用いられない。

(42) 他的病已经好了，今天能(×会)游泳。

(訳：彼の病気はもうすっかり治ったから、今日泳げる)

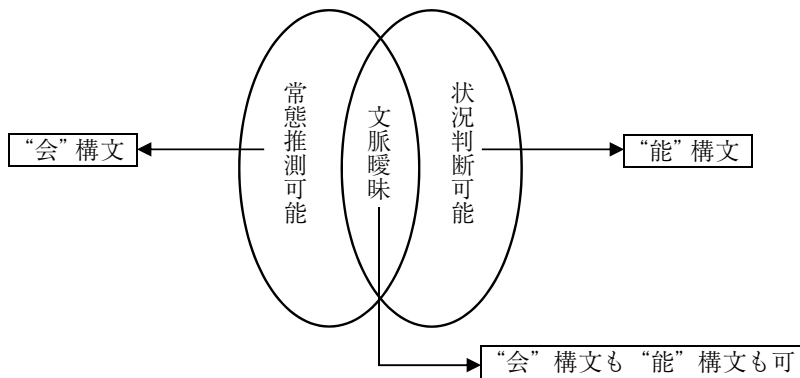
5 結論

認知意味論の観点から可能表現のメカニズムについて考えてみると、人々が生活の営みのなかで、さまざまな動きや自然現象に対してある判断を下すことやある推測を行うことが多々ある。それを観察し認識したうえでその事態(イベント)を認知的にどのように言語化していくかについて、可能表現に限って言えば、日本語では細かい言い分けをしないようだが、中国語では刻一刻の変化があり得るような状況下において、「ある動作・行為できるか否か」の判断を行う場合に“能”構文が、常識範囲内で変化のないような常態下において「ある動作・行為できるか否か」の推測を行う場合には“会”

構文がその役割を担うと本稿の考察で明らかになった。

したがって、“能”と“会”構文のメカニズムについて下図のようにまとめることができる。

図2：“能”・“会”構文のメカニズム



本稿は“能”と“会”構文を中心とする可能表現のメカニズムを考察してきたが、今後の課題として他の中国語可能表現メカニズムの解明やその基本的な意味特徴、構文的な意味機能の分析などが挙げられる。

6 教学上の提案

以上の考察を踏まえ、教育現場で可能を表す“能”と“会”構文の指導法に関する提案をしてみたい。

- ◆ “能”構文は「状況判断可能」としての意味機能で使われ、次のことがいえる。
構文的意味：話し手は「さまざまな状況の下、主語がある動作・行為できる」との判断を行う。
意味特徴：「動態的」・「臨時的」な表現である。
- ◆ “会”構文は「常態推測可能」としての意味機能で使われ、次のことがいえる。
構文的意味：話し手は「常態の下、主語がある動作・行為できる（だろう）」との推測を行う。
意味特徴：「静態的」・「恒常的」な表現である。

まず各種教科書や学習参考書などには、“能”と“会”の異なる意味特徴などと併せて、4.3で挙げた用例のように、両者が共通して使用可能な言語環境をも明記することが望ましいと考える。次に教員は可能表現を教室指導する際、“能”と“会”の意味特徴や構文の意味などをしっかりと理解したうえで教科書の文法説明をすること、また両者の共通する点と、異なる点を明確に解説することで、中国語学習者にとって難点の一つである“能”と“会”の習得が比較的容易なものになるだろうと思われる。

注：

- (1) 本研究は、平成29～31年度科研費基盤研究（C）（課題番号：17K02900、課題名『現代中国語における可能表現の学習効果－導入及び習得データに基づく実証分析－』、代表者：安本 真弓）の助成を受けたものである。
- (2) 吉田泰謙・安本真弓（2018）「中国語可能表現の習得状況に関する考察－大学における調査結果を中心に－」155～156頁を参照されたい。
- (3) 本稿は可能表現の理論的な構築に関する研究で、注（1）で記した科研費助成を受けたものである。また、2017年12月2日のお茶の水女子大学にて共催された日本中国語学会2017年度第3回関東支部例会、およびお茶の水女子大学中国文学会2017年度第四回例会で発表したレジュメをもとに加筆修正したものである。
- (4) 本稿は、安本真弓（2017）「“会”と“能”の意味相違について」の結論に類似している部分もあるが、理論的構成や考察の方法は全く異なるものである。
- (5) 文法書ならびに先行研究、用例の中国語記述に付された日本語訳はすべて著者訳である。
- (6) ジョージ・レイコフ／池上嘉彦・河上哲作他訳（1993）『認知意味論－言語から見た人間の心』203頁では、「生得説の客観主義の認知論」について次のように述べている：「われわれの概念体系、すなわち、われわれが思考の際に用いる記号体系は生得的なものであり、世界にある『もの』やカテゴリーに正しく対応する能力を通じて意味を持つように作られている。言い換えれば、われわれが生まれつき持っている心的表示は『意味論的に評価可能である』。つまり真であるか偽であるか、世界の『もの』やカテゴリーを正しく指示しているかどうか決めることができる。」これに従えば、本稿の研究対象とする可能表現という概念体系も、「世界にある『もの』やカテゴリーに正しく対応する能力を通じて意味を持つように作られている」とされる。つまり、「われわれが生まれつき持っている心的表示」の1つであり、『意味論的に評価可能である』となる。そこで、本稿は中国語可能表現の“能”と“会”構文を意味論的に評価していくことにしたい。
- (7) 例（19）の“抽烟”（タバコを吸う）行為はある意味ヒトの能力とみなすこともできるが、いささか抵抗を感じたため、嗜好という語にしたのである。
- (8) 常態という用語について、変化のない均一状態を指す。注（3）の学会例会発表時「一定の状況」と表現したが、会場より「さまざまな状況」との区別が曖昧だとの指摘を受けた。後にお茶大の若森幸子先輩からアドバイスされたものとなる。

参考文献：

〈日本語〉

- 相原 茂（1997）『謎解き中国語文法』、pp.12-55、講談社。
- 大江元貴（2015）、「中国語の可能形式“能”“会”“可以”：「可能」概念を構成する力に着目した分析」、『文藝言語研究 言語篇』67巻、pp.41-67。
- 片桐光知子（2006）「現代中国語における助動詞“会”と“能”の意味分析」『日中言語対照研究論集』第8号、pp.152-164、白帝社。

河上誓作 (1996)、『認知言語学の基礎』、研究者出版株式会社。

金田一春彦 (1957)、「時・態・相および法」、『日本文法講座Ⅰ総編』、明治書院。

黄麗華 (1995)「中国語の可能表現の“能”、“可以”、“会”」『日本語研究』15号、pp.78-87、東京都立大学国語学研究室。

ジョージ・レイコフ／池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993)、『認知意味論－言語から見た人間の心』、紀伊國屋書店。

張素娟 (2014)、「可能にかかわる要因からとらえる“能”と“会”の意味特性」、『現代社会文化研究』No59、pp.51-64。

渡邊奈津子 (2014)、「可能を表す“能”と“会”と共起可能な動詞句の相違について：インフォーマント調査とコーパスの用例から」、『言語・地域文化研究』No20、pp.1-13。

安本真弓 (2017)、「“会”と“能”の意味的相違について」、『高橋弥守彦先生古希記念論文集』、pp.13-25、日本語文法研究会。

吉田泰謙・安本真弓 (2018)、「中国語可能表現の習得状況に関する考察－大学における調査結果を中心に－」、『関西外国語大学 研究論集』第108号、pp.151-168。

〈中国語〉

侯瑞芬 (2009)、「从力量与障碍看现代汉语情态动词“可以”“能”“会”」、北京大学汉语语言学研究センター『语言学论丛』第四十辑、pp.270-298。

呂叔湘 (1999)、《现代汉语八百词（增订本）》、商务印书局

王力 (1954)、《中国现代语法》、中华书局。

王小梅 (2013)、「“能”和“会”的同义词辨析」、《江西科技师范大学学报》2013年6月第3期、pp.20-25。

叶玉英 (2014)、「“能”与“会”的主观性差异」、《成都师范学院学报》第30卷第8期、pp.46-51。

朱德熙 (1982)、《语法讲义》、商务印书馆。